

「患者さんの手になる看護」

青木 智嘉

どんなに看護技術を身に付けても、どんなに病気について勉強しても、看護師は患者さんの苦痛を取り除く事はできないのだと痛感したのは、初めての病院実習での事だった。

患者さんから伝わってくる気持ち悪い、苦しい、つらい、申し訳ない、恥ずかしいといった気持ちを感じ取れたが、何もできない自分が不甲斐なくて、無力で、悔しかった。

患者さんにあれをしてあげよう、いっぱい話そう、勉強しよう。そういった前向きな気持ちが現場で一瞬にして破壊された。意気込みは単なる患者さんへの押し付けにしかならないのだと気付かされた時、私は大きな壁にぶつかった。私はどうしたらいいのだろうか。何をすべきなのだろうか。

カンファレンスで泣きながら同級生に問いかけた。私はどうしたらいい、何をすべきで、何をすべきなのだろうか。答えは返ってこなかった。それが虚しかった。私達が学ぶべき事や、答えを見出すべき事に、私を含めた誰一人答えられなかったからだ。

今でも思い出すのは、気弱になっていた私を励ましてくれた担当の先生の言葉だった。「貴女は悪心を訴えた患者さんの背をさすってあげた、お小水の時に看護師さんと呼んでそのお手伝いをした、大きな薬を小さく砕いた方がいいと提案したり、飲み物を飲ませてあげる時、間にちょっと休憩を入れて飲み下しやすいようにしたりしてあげた。それが貴女のやった看護でしょう。」

自分が患者さんの立場だったらやってほしい事を実習中、ずっとやってきた。気持ち悪い時は背中をさすってほしい。大変だったら手伝ってほしい。飲み込みづらかったら薬を小さくしたい。食事や飲み物は一気に飲み込んで苦しいから一呼吸置きたい。

私の看護は、いかに患者さんの目線と自分の目線を同じにして、患者さんの身になって、患者さんの手として、日常をおくるお手伝いをする事だと思う。

実習前までは、特別な技術を用いる事が看護だと思っていた。しかし、ただ日常において自分がしている、またはしたい事を患者さんの手として行う事も看護であり、日常生活をサポートするという看護師の重要な役割であると気付かされた。

私の看護は、いかに患者さんの目線と自分の目線を同じにして、患者さんの身になって、患者さんの手として、日常をおくるお手伝いをする事だと思う。

健康な人にとって何でもない日常の行動も、患者さんの中にはそれが出来なくなってしまう人がたくさんいる。実習では患者さんの出来る事をご自分でできるようにお手伝いしたり、出来ない事は代わって行っていたりした。しかし、どこまでお手伝いをして、どこまでを代わりにやるかを見極めるは非常に難しかった。

個人個人によってできる事、できない事は大きく異なってくる。その境界線を的確に見極められるよう、これからの学習や実習により専念していきたいと思う。